住宅地における小規模コミュニティ施設の利用実態とそのあり方

—札幌市内の町内会館を事例として—

ON ACTIVITIES AND DESIGN OF SMALL COMMON HOUSES IN RESIDENTIAL AREA

—In case of local assembly halls in Sapporo—

鴨川木綿子 —*1 野口孝博 —*2

Yuko KAMOGAWA —*1 Takahiro NOGUCHI —*2

キーワード：
地域コミュニティ施設, 町内会館, 最小利用圏域, 小規模, 住民要求Keywords:
Local community center, Local assembly hall, Smallest user range, Small size, Requests of inhabitants

The activities and problems of local assembly halls in Sapporo are clarified. And we considered the state of small common houses closer to the residents. The findings are as follows. ① The space which can perform various things in one space. ② The gallery which local information can send. ③ Equipment and service which solve a local problem. ④ It is necessary to be smaller common houses.

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

近年、ライフスタイルの多様化が進行する中で、地域的・地縁的・伝統的コミュニティは、その役割と存在が希薄になりつつある¹⁾。しかし、コミュニティは日常の安全や防犯の確保、災害時の地域における相互協力、高齢化に対応した福祉・介護等に欠かせないものであり、今後少子高齢化が進行していく社会において、その役割はより良い地域の環境をつくるために欠かせないものだといえる²⁾。

近隣の住民が集まって、活動出来るようつくられた施設に集会施設がある。特に、地域に根ざした集会施設とは、地元住民が住宅機能の延長として利用することができる空間であり³⁾、その最小単位である町内会館は、地域住民にとって最も身近な所にある地域コミュニティ施設であるといえる。これまで、そういった町内会館などの地域コミュニティ施設が、地域住民に対して担ってきた役割は大きい。しかし、社会的背景の変化とともに、町内会館に必要とされる役割が変わりつつあり、高齢社会における地域の役割も新たに見直す必要が出てきている。人と人をよりゆるやかにつなぐための活動や連絡を促すような、新たな活動の場が、町内会館といった身近な場所に求められている。

そこで、本研究は札幌市にある町内会館の実態と現状の問題を明らかにした上で、地域に根ざした、住民にとって身近な小規模コミュニティ施設のあり方とその可能性を考察する。

1.2 既往研究

公民館など地域施設についての研究は、公民館設立初期から、公民館成立の背景や系譜に関する研究⁴⁾、建物自体の特性に関する研究⁵⁾など様々な研究がある。近年においても、施設の利用範囲や適正範

囲に関する研究⁶⁾⁷⁾、施設のオープンスペースに関する研究⁸⁾⁹⁾、事業内容や利用状況に関する研究がある¹⁰⁾⁻¹²⁾。その中でも本研究は、地域施設の中でも最も利用圏域が小さな町内会館に絞り、現状の活動内容や利用実態に留まらず、新たな利用方法や小規模コミュニティ施設の可能性までとらえている点に特徴がある。

1.3 調査方法

町内会館の利用実態と住民の町内会館に対する満足度や要求を把握するために、本研究は3段階に分けて調査を行った(表1)。

第1次調査は、町内会館の利用状況や管理方法、会館概要についてのアンケートを札幌市内の各区(10区)が発行している市民集会施設一覧表に記載されている町内会館へ郵送した。また、第1次調査結果から以下の条件を満たす町内会館に対して、町内会館の利用状況や管理方法、今後の方針についてより詳細なヒアリングを第2次

表1 調査概要

	1次調査	2次調査	3次調査	
調査日	2003/7/28発送	2003/9/12, 16, 17	2003/9/25-27, 29, 10/4	
調査対象	町内会館	1次調査結果より選定*1	周辺住民	
調査地域	札幌市全域	——	札幌市円山北町*2	札幌市平岡*2
調査方法	郵送アンケート	ヒアリング	郵送アンケート	
質問項目	・利用状況 ・利用者層 ・使用内容 ・管理方法 ・会館概要 (形態・設立等)	・利用状況 ・利用者層 ・使用内容 ・管理方法 ・宣伝方法 ・今後の方針	町内会館について： ・利用状況(内容・頻度) ・利点/欠点 ・満足度 ・今後のあり方 他の公共施設について： ・利用状況(内容・頻度) ・利点/欠点 ・満足度	
配布/回収数 (回収率)	329/155館 (47.1%)	5件	133/103人 (77.4%)	139/120人 (86.3%)
回答者平均年齢	——	60~70歳代	50.63歳	58.1歳

*1 次の条件より選定
①立地場所が住宅地内 ②住民の利用頻度が高い・利用内容が豊富 ③会館形態が特徴的
*2 各地域にある町内会館を中心に半径500m圏内

*1 北海道大学大学院 修士課程
(〒060-8628 札幌市北区北13条西8丁目)
*2 北海道大学大学院工学研究科 教授・工博

*1 Graduate Student, Graduate School of Eng. Hokkaido University
*2 Prof., Graduate school of Eng., Hokkaido University, Dr. Eng.

調査として行った。調査条件は、①立場所が住宅地内にある、②住民の利用頻度が高い、もしくは利用内容が豊富である、③会館が他の施設と併設しているなど形態が特徴的である。さらに、第2次調査を行った会館の中から、交通機関が充実し集合住宅が多いといった、都市型住宅地である札幌市中央区円山北町と、郊外型戸建住宅地である札幌市清田区平岡の2ヶ所において、町内会館の利用状況や満足度、町内会館に対する要求などについてのアンケートを、それらの町内会館を中心に半径500m圏内に住んでいる人々の中から、留置自記法により世帯主もしくはその妻を中心として各地域100人程度を対象に第3次調査として行った。

1.4 札幌市内にある公共コミュニティ施設

札幌市では地域社会単位を、地域の特性や生活圏から、市域に「区」「地区」「近隣住区」と段階的に設定し、その単位に対応したコミュニティ施設を設置している。その基本的な整備体制の分類を表2に示す。対象住民の規模が一番小さなコミュニティ施設は市民集会施設である。市民集会施設は、集会施設、福祉会館といった町内会が主体となって設置した施設の総称であり、336館中329館が町内会での集会を目的として建設された町内会館であり、本研究の対象施設である¹³⁾。

表2 地域コミュニティ施設の整備体制(札幌市)¹³⁾

	区民センター	地区センター	地区会館	市民集会施設 (主として町内会館)
地域社会単位	区	地区	近隣住区	
施設概要	地域住民の生活文化、教養の向上とコミュニティ活動の助長を図り、地域住民の福祉の増進に寄与すること目的とした施設	文化・スポーツなどを通じた地区住民のコミュニティ活動の拠点となることを目的とした施設	区役所の出先機関として連絡所というものを地区ごとに設置しており、その施設に集会機能を強化した施設	集会施設、福祉会館など町内会が主体となって設置した施設
設置基準	範囲 対象人口	区 全 域 20万人	・ 既存施設から遠隔地区 ・ 2～3連合町内会単位 4～6万人	・ 概ね半径500mの区域 ・ 1～2単位町内会単位 2～3万人
建設基準	敷地面積 延床面積 設置主体	敷地面積 延床面積 設置主体	敷地面積 延床面積 設置主体	敷地面積 延床面積 設置主体
	敷地面積 延床面積 設置主体	敷地面積 延床面積 設置主体	敷地面積 延床面積 設置主体	敷地面積 延床面積 設置主体
	敷地面積 延床面積 設置主体	敷地面積 延床面積 設置主体	敷地面積 延床面積 設置主体	敷地面積 延床面積 設置主体
運営方法等	地元の運営委員会	地元の運営委員会	・ 連合町内会に貸付 ・ 連合町内会が運営委員会を組織し運営	町内会が自主運営
施設の現状等	10館	21館	55館	336館

2003年10月時点

図1 町内会館の延床面積

図2 町内会館の部屋構成(保有率)

図3 町内会館の設置場所

2. 町内会館の現状と利用実態

2.1 町内会館の施設現状

札幌市における町内会館の規模や空間構成など施設面についての現状を調査結果より明らかにする。

札幌市にある町内会館は単独、もしくは複数の町内会が主体となり設立する。施設規模は町内会の規模と財力によって異なるが、延床面積の多くが概ね300㎡前後であることが分かり(図1)、札幌市の地域コミュニティ施設整備体制(表2)より現状は規模が大きいことが明らかになった。さらに、会館は一般的に大集会室、小集会室(和室)、調理室を中心に構成されており(図2)、多くが住宅地内(67%)に建てられている(図3)。会館の管理方法は次の4つが主に挙げられる。①管理人が会館に住み込み(24%)、②開館中は管理人が常駐(22%)、③開館中、決められた時間もしくは利用者がいる時間ののみ管理人が在館(27%)、④管理人なし(27%)、というように、それぞれ同程度の割合であった。また、管理方法の違いによる利用状況の違いはさほど見られなかった。

基本的な外観は、正面に大きな看板があり、町内会館であることが一目で分かるようになっている(図4写真1, 2)。そして、正面にはその会館で行っている活動の情報が貼られている所も多数ある(図4写真3, 4)。しかし、「どんな活動をしているのか外から全く分からない」、「内部の様子を知らない」といった住民の意見からも、多くの会館が中でのどのような活動をしているか外部の人には分かりにくい状況であることもうかがえる。また、玄関先に段差がある会館や(図4写真5-7)、館内にエレベーターが設置されていない会館が多いなど(図5写真3)、ユニバーサルデザインの点からも高齢者や障害者

大きな看板がある町内会館の例

写真1: 大きな看板があるが、駐車場の前面にあるため認識しづらい。

写真2: 大きな看板が通りに面している。

正面に会館の情報を掲示している町内会館の例

写真3: 専用の掲示板に会館の情報を掲示している例。

写真4: 窓に情報を掲示している例。窓に貼っているため中の様子が見えない。

玄関先の状態例

写真5: スロープがついている例。こういった配慮のある会館は少ない。

写真6: 段差があるが、手すりも設置されている。

写真7: 段差があり、手すりもない。多くの例である。

図4 町内会館の外観事例

などに対して十分に配慮した造りになっていない。

図5は第3次調査対象の町内会館である。これらの会館は他の会館と同様に、大集会室、和室、調理室を中心に構成されているが、都心部にある円山北町の方は葬式の利用をなくし、習い事やサークル教室を増やすことで、専門性を持たせた会館を目指している。一方で、郊外地にある平岡の方は児童会館と併設し、玄関など共用部分があるため、高齢者と子供たちが接する時がある。このように、他の会館に比べると、内容もしくは構成に特徴を持っている会館である。

以上から、町内会館は利用圏域が最小であり、地域住民にとって最も身近な場所にある施設である。また、町内会館は大集会室などある程度の広さを持つため、公共的な集会施設としての機能を持つ。一方で、和室などは隣人同士が集まって利用するなど住宅機能の延長として利用できる空間も持つ。それ故に、現状の問題点を克服すれば、今後大いに活用できるコミュニティ施設となる可能性がある。

図5 調査対象地域の町内会館

2.2 町内会館の利用実態

現在ある町内会館に対する周辺住民の利用実態を検討する。

町内会館の利用頻度について「月1回以上利用している」と答えた住民は19.2%で、「利用したことがない(41%)」と答えた住民の約半分である(図6)。

利用したことがある人は、町内会の総会や役員会などの「町内会関係(65%)」と町内会で組織されている「老人クラブ・婦人会(31%)」での利用がほとんどである(図7)。それ以外では「習い事(19%)」、「葬儀(15%)」、「サークル(9%)」と貸室としての利用が多い。

一方で、利用したことがないと答えた住民の理由は、「町内会役員会や葬式に使うための場所だから、利用できないと思っていた」、「情

図6 町内会館の利用頻度

報が少なく何をやっているのか分からない」など、住民に会館での活動に関する情報が伝わっていない状況がうかがえる。また、会館を利用しようとしても、「子供を連れての集まりには貸してくれない会館がある」というように、会館の規制等²³⁾で利用していないなどが考えられる。

また図7から、個々人が自由に利用する「友達との遊び」や「展示・掲示鑑賞」、「新聞・本閲覧」などといった内容は、身近に町内会館があったとしてもこういった利用ができない会館が多いため、住民は他の公共施設²⁴⁾を利用している現状がうかがえる。実際に、町内会館のある場所や家から会館までの距離についての満足度は、8割以上の人が「まあ満足」と回答している(図8)。

これから町内会館での活動に関する情報が住民に伝わっていない。もしくは町内会館が住民にとって利用しにくい、またはニーズと合わないなどの理由から、コミュニティ施設の中で最も身近な場所にあるにもかかわらず、一部の住民の利用に留まり、多くの住民にほとんど利用されていない状況がうかがえる。

図7 住民の公共コミュニティ施設での利用内容(重複回答²²⁾)

図8 町内会館の立地条件に対する満足度

3. 町内会館に対する住民要求

今後の小規模コミュニティ施設のあり方を考察するために、外観など総合的に見た町内会館のあり方と、町内会館に求める部屋や設備について、住民にアンケート調査を行った。

3.1 町内会館に望む部屋・設備

まず町内会館に今後あったら良いと思う部屋もしくは設備については、「情報誌を読んだり、パソコンが利用できるコーナー(39%)」が最も多く、ついで「軽い運動や子供たちが遊ぶ部屋(31%)」が多かった(図9)。これらは、他の公共施設²⁴⁾で利用している内容と合致しており(図7)、より身近な場所に上記のような機能を求めていることがわかる。また年齢別に比較すると、30歳未満は他の年齢層より、「勉強など個人利用ができる部屋」を多く望み、逆に60歳以上は「子供の作品や大人の趣味などを発表する場」を多く望んでいた。つまり、読書や子供の遊びといった日常生活行動ができる住宅機能を延長としたような空間を求めている、多様なニーズに対応できるスペースが必要とされていることがわかる。

「情報を掲示する場所(30%)」に回答した住民の中には、「地域の情報が少ない」という意見が多く聞かれ、情報不足に不満を持っていることも分かる。そのため地域情報や趣味など地域住民の活動内

容を知らせるギャラリーのようなものも大切であるといえる。

「介護・福祉サービスが行える部屋(26%)」に回答した中に「高齢化の現状を踏まえるべき」という意見もあり、高齢社会を意識した結果といえる。また、「介護・福祉サービス」に回答した住民の比率を円山北町と平岡と比較すると、平岡では「特に必要」と回答した人が円山の約5倍もあり、平均年齢の高い平岡の方がその必要性を強く感じている事がわかる。このように地域によっても問題は異なるため、各地域にあった設備やサービスがあることが望ましい。

図9 今後あったら良いと思う部屋・設備(重複回答^{注2}(223人中))

3.2 町内会館のあり方における住民意向

さらに、総合的な観点から町内会館のあり方を明らかにするために、今後望ましいと思う町内会館はどのようなものであるか、各項目に対して「必要・不必要・どちらでもよい」から選択形式で住民に尋ねたところ、「気軽に立ち寄れることが必要」と回答した住民は全体の92%にも及ぶ(図10)。

ついで「開放的なデザイン(51%)」、が多かった。「どんな活動をしているか全く分からない」、「内部の様子を知らない」といった理由で町内会館を利用していない住民や、会館でのサークル活動に参加している住民からも「入ってからしばらくは抵抗があった」という意見が聞かれた。実際に、この結果は先に述べた町内会館の外観形態の問題点に関係していると思われる。

「便利な場所に設置する(36%)」、「溜まり場として利用できる(33%)」が続いて多かったことから、身近な場所に気軽に立ち寄れるような施設を望んでいることが分かる。

現状の町内会館は集会施設としての機能を補完した規模であるが、より気軽に利用を促すようなコミュニティ施設にするためには、現状の町内会館より小さな規模と利用範囲にし、住宅機能を延長した空間を中心とする施設が望ましいと考えられる。

図10 望ましいと思う町内会館

4. まとめ

札幌市における町内会館は以下のような特徴を持つ事が分かった。
①公共施設の中で規模・利用圏域が最も小さい、②空間構成は集会施設としての大きな空間と、一方で和室などは隣人同士が集まって

利用するなど住宅機能の延長として利用できる空間も持っている、③会館内での様子が外から分りにくい、④玄関に段差などがあり、高齢者などに配慮した造りになっていない。一方で、周辺住民の多くが町内会館を利用していないことが明らかになった。その理由として、町内会館での活動が住民に知られていない事、住民のニーズと合わない事などが挙げられる。

住民の町内会館に対する要求を調査した結果から、身近にある今後の地域コミュニティ施設としては、①読書や子供の遊びなどといった日常生活行動ができる住宅機能を延長としたような、一つの空間の中で多様な事が行えるスペース、②身近な地域情報の発信や、趣味など地域住民の活動内容を知らせるミニギャラリーのような場、③高齢化に対応した介護・福祉サービスが行える部屋など、地域問題を解消するような設備やサービス、などが必要であるといえる。

また上記の機能に加え、より気軽に小規模コミュニティ施設にするためには、①開放的な外観や玄関先、②高齢者なども利用しやすいユニバーサルデザインなどの工夫、③隣人や友人同士が家庭的な雰囲気で見られる設備の充実、④現状の町内会館より概して小さな規模と利用範囲にする、などを考慮することにより、そこを利用する住民がお互いを認識し、日常的な交流につながる可能性が大きいと思われる。今後はさらに、身近にある既存の空家や住宅内の空部屋をコミュニティ施設として活用することも考えられ、今後の研究課題である。

注記・参考文献

注1 区民センター、地区センター、地区会館、児童会館など

注2 選択肢の中から3項目以内の選択回答、その中からさらに「よく利用/特に必要」とする項目を1項目選択回答してもらった。

注3 多くの町内会館は町内会員と非会員で値段が異なるものの、誰でも有料で利用できる。しかし、事前予約が必ず必要であったり、個人的な集まりの場合は利用できないなどの制約がある町内会館が多い現状がある。

- 1) 船越徹、寺嶋修康、水澤晶子：広場型集合住宅における空間的コミュニティの概念と計画、日本建築学会技術報告集 第17号、P. 315、2003年7月
- 2) 札幌市総務局都市経営室：「協同型社会を支える地域力を育てる-地域コミュニティ・インキュベータ機能調査(平成14年度)-」、2002年12月
- 3) 佐藤正義、八木澤壮一、吉村彰：地区会館における「くつぬぎ空間」について-地域密着型施設の建築手法に関する研究 その1-、日本建築学会学術講演梗概集(E-1)、P. 431、1997年
- 4) 増岡裕子、小川信子、北田優子、小林深智子：公民館(三多摩地域における現状とその考察)：日本建築学会大会学術梗概集 計画系、P. 565、1976年
- 5) 若木滋、浅野平：八公民館の施設機能について 地域教育関連施設計画に関する研究(1)：日本建築学会計画系論文集 第330号、P. 122、1983年8月
- 6) 大澤義明：地域施設計画モデルにおける計画施設数と最適配置及び最適距離との関係、日本建築学会計画系論文集 第482号、P. 165、1996年4月
- 7) 藤繁和、浅野平八：地域集会施設配置の最小単位について-都市居住地域における地域的拠点施設整備に関する基礎的研究 1-、日本建築学会計画系論文集 第523号、P. 147、1999年9月
- 8) 広田直行：寒冷地の地域集会施設における施設内オープンスペースの形成過程と役割-公共建築のオープン化に関する基礎的研究 1-、日本建築学会計画系論文集 第490号、P. 83、1996年12月
- 9) 広田直行、狩野誠、浅野平八：「施設内オープンスペース」にみる地域的個性-公共建築のオープン化に関する基礎的研究 2-、日本建築学会計画系論文集 第503号、P. 101、1998年1月
- 10) 李乙圭、高橋廣志、鈴木毅：社会的交流からみた地域施設の利用しやすさに関する考察-東京都の社会教育施設のケーススタディー-、日本建築学会計画系論文集 第493号、P. 145、1997年3月
- 11) 河川淑子、多治見左近：自主事業からみた公民館の特徴及び地域性に関する研究-奈良市公民館のケーススタディー-、日本建築学会計画系論文集 第536号、P. 125、2000年10月
- 12) 金潤煥、浅野平八、広田直行：地域施設の再編に係る公民館の構成機能と多様性、日本建築学会計画系論文集 第569号、P. 63、2003年7月
- 13) 札幌市市民局：「札幌市の区勢(平成15年度)」、2003年

[2005年4月19日原稿受理 2005年7月22日採用決定]